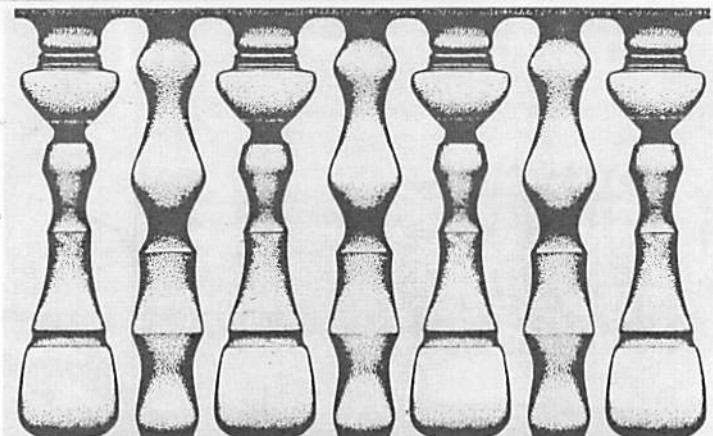
93. 8月. 9月号. 大学受験アルファ (代々木セミナー)



Adventure of Eyes

だまし絵と視覚認知

丸みをおびたデザインの柱の列。しかし、柱の隙間をじっと見つめると、女性の横向きのシルエットが並んでいるようにも見えてきます。柱が見えたときには女性のシルエットは見えず、女性のシルエットが見えたときには柱は見えなくなります。これをゲシュタルト心理学では「図と地の反転」といいます。つまり人間は柱や女性のシルエットといった部分部分を見ているのではなく、絵の全体的な構造や性質を見て、認識しています。つねに人間は背景となる「地」の上に浮かび上がる「図」を見ているわけです。この絵の場合は、柱と女性のシルエットが図にも地にもなりうるため、どちらとも確定できないあいまいなものとなっているのです。このように錯覚やあいまいさに基づいただまし絵は、人間の視覚・認知システムを探るうえでも重要な意味を持っています。あいまいな図と地、不可能な立体、何通りにもちがって見える図形など、視覚がどのように惑わされるかを知ることで、私たちが網膜に投影された2次元の画像情報からどのように3次元世界を再構成して認知しているかがわかるわけです。

(図版は、R・N・シェパード『視覚のトリック』鈴木光太郎・芳賀康朗訳、新曜社刊より。著者自作のだまし絵の数々を紹介し、それらが視覚認知とどのように関わっているかを解説しています)